岳　2　月

宮坂静生
推　　薦

寒の夜の怒濤は腰に響くとよ　小林貴子

本音いふための気力や極月へ　堤　保徳

冬の虹越えて且坐喫茶のこころ　栗原利代子

星々の吹き拭はるる神遊　川村五子

鞘嵌めて休ます刃物年の尾へ　大野今朝子

セーター脱ぐもろともに顔裏返す　安部克詠

滂沱忌の朝霧天竜川のしつぽ　古畑富美江

いぶりがつこ一万本やきつね雨　菅原砂登子

韃靼海峡を渉る凩しまきけり　秦　順子

勾玉は神の足形冬ぬくし　丸山貴史

死ぬる前いつぱい笑ふ小春かな　田中信寿

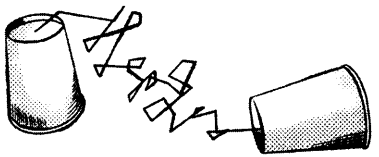
何もかも捨てて真っ新枯木星　大西健文

天鵞絨に集まる闘志鶏頭花　下条久子

*

一枚の夜長にくるむ割れもの吾　伊藤由希子

菊なます障子明りに鵙屋琴　宮岡光子



銀杏落葉踏みしめ服の色決める　曽根原とうこ

北斎の春画見蕩るる除夜の炉よ　有手　勉

石蕗咲くや白湯を汝に供したる朝　水野星闇

茅屋根にこもる雨音浪化の忌　久保美智子

続続とサンタクロース窯を出る　金井勝代

ドラム缶の火の爆ぜぞろり鱈の糶　木村由里子

山眠るお鷹ぽつぽの木つ端飛ぶ　穂苅真泉

わが座卓荒野のごとし遠い火事　我妻民雄

うねり来る伊福部昭夜長なる　荒川美恵

御神気のかくも冷たき出雲かな　長尾裕美子

聖夜近し介護士飾るまつぼっくり　佐藤初子

舞ふ木の葉人も一瞬一舞台　櫻井喬二

雪を呼ぶものばかり画く絵描きかな　髙橋節子

明日一つ失くす腎臓冬銀河　山崎晶市

雪が舞い芹避難する水の中　齋藤元紀

半世紀への光 ―― 岳俳句二月　同人集・岳集から (558)

宮坂静生

巻頭言　俳句入門書を再び読み直したい。初めて句作を始めた時と同じ入門書でいい。私の『改訂版俳句第一歩』（二〇〇六年十月刊・花神社）が絶版になって久しいが、手元に私用がある。これを読み直しながら手短におさらいをしている。例句が古くないのに驚いている。

実は二十年前に上記の改定版を出すときに花神社の大久保憲一さんから『俳句半歩』という冥途の土産に持っていってもいい軽い本を出してくれないか要請された。出しましょうとかる請け合いをした。俳句の決まりの解説は僅かで、例句もこれだけはという好きな句をエピソード風にまとめるもの。今でも私の中で企画は生きているのだが、大好きな大久保憲一さんがいなくなり、私も米寿を越え、冥途が近くなった。さてどうなるのか、しかしそんな妄想を抱いているのである。

古田晁という猛獣のようなとびきり優れた出版人

滂沱忌の朝霧天竜川のしつぽ　古畑富美江

滂沱忌は戦中戦後の出版社筑摩書房創立者（創業昭和十五年六月十八日）古田晁の命日、十月三十日を指す。長野県東筑摩郡筑摩地村（現塩尻市）北小野に生家が残り、筑摩書房に関係した資料などが保存されている。本好きには聖地である。滂沱忌とはなぜ名づけられたものが知らないが、岩波茂雄と並ぶ巨人といってもいい汗滂沱、苦労滂沱の人、古田晁を『安曇野』（臼井吉見）などから推測するに、朝霧立つ北小野の地形は天竜川のしっぽに当たる。肥沃の地のイメージではない。作者も意欲的。強靭な胃袋の持ち主である。

寒の夜の怒濤は腰に響くとよ　小林　貴子

糸魚川の俳人「黒坂愛子さん曰く」と左注がある。「腰に響く」と潮鳴りを腰で受け止めた所が、土俗の強さを思わせる。頭に響くなどではない。その地に生きる人の身体の強靭さによる着想が哀しくも生かされている。

本音いふための気力や極月へ　堤　保徳

うわべの言葉ではない。本音をいう。当然であるが、世渡りは本音ばかりでは纏まらない。時に世に合わせることもある。これからは本音でいくと、今年も終わるぎりぎりに心に決めたという。地味ではあるが、本誌の苦労人の搾り出した言葉。

冬の虹越えて且坐喫茶のこころ　栗原利代子

「且坐喫茶」とはお茶でも飲みましょうの意。「喫茶去」という禅語と同じ。句会仲間の杉木妙子さんへの悼句。冬の虹を越えるとはご苦労した後を思い描いたものか。時に自分に言い聞かせ、自分を納得させて暮らすのが日常である。俳句の効用でもある。〈無尽蔵メリケン刈萱の絮は〉にも注目した。

星々の吹き拭はるる神遊　川村　五子

冬の里神楽の場を思い描いた。寒風が洗い出し天上に星が煌く。平安な日常を願うのが神楽舞の願うところ。新しい年が来る。冬は神楽の季節である。

鞘嵌めて休ます刃物年の尾へ　大野今朝子

がっちり決めた句である。刃物を磨き、鞘に納める。山仕事に従事する杣の毅然とした仕事納め。厳しい自然相手の暮らしは気を緩めることができない。

セーター脱ぐもろともに顔裏返す　安部　克詠

セーターを脱ぐとわが顔の皮まで剝けて裏返ってしまったという。着想に茶目っ気と奇怪さが綯交ぜに、小泉八雲の怪談噺ではないが、ぬぅーっとのっぺらぼうの顔を突き出されたら腰を抜かす。その顔がいう「剝けまして（あけまして）おおめでとう」。

いぶりがつこ一万本やきつね雨　菅原砂登子

これぞみちのく。燻製の大根が一万本。折から天気雨の取り合せがいい。俄か雨も半端ではない。夕立さながら寸時の自然の猛雨を想像した。

今月の秀句

何もかも捨てて真つ新枯木星　大西　健文

真冬の枯木の間から見上げる星を「真つ新」と見た。清冽な着想だ。葉を落とした枯木の間に光る星が真新しいという。当然枯木からの連想が星に及んだもの。昭和俳句の旗手山口誓子の発想と似ている。青年の発想だ。ようやく印象に残る句が生まれた。記者のセンスがどこかに生きている。

韃靼海峡を渉る凩しまきけり　秦　順子

サハリン（樺太）とシベリア大陸の間の海峡（間宮海峡）が韃靼海峡。日本海へ向いしまく凩である。極寒そのもの。名高い詩の「蝶」ではない。私には、重き病に呻吟する作者の心境句に読める。よくぞ耐えに耐え、俳句を杖に頑張っている。このように俳句が支えとなる。感動だ。

勾玉は神の足形冬ぬくし　丸山　貴史

神社の勾玉から「神の足形」への発想に無理がない。神自体は裸眼では見えないが足形から連想が広がる。作者は歌人の母（一時本誌でも活躍）譲りの詩人肌。生得的なものか。歌謡曲の歌い手で音感に秀でる。俳句も熱心ではっとさせられる。着実である。これほどに実力をつけて来られるとは、長い付き合いの中で密かに涙が滲むほどうれしい。本業は優れた建築技術師。余人が継げないほどの仕事をしている。

死ぬる前いつぱい笑ふ小春かな　田中　信寿

こんなこともあろう。小春日和におばあちゃんが今日はよく笑う。家族に友達に、いい笑顔を置き土産に世を去る。これが人生最高ではないか。笑顔にはつねに人生がある。

天鵞絨に集まる闘志鶏頭花　下条　久子

面白い見方である。ぼってりした肌触りのビロードの花。そこに鶏頭の矜持を見た。秘めた闘志とは堂々たる句だ。

日本美の極致とはさりげない。『春琴抄』の世界へ挑戦

菊なます障子明りに鵙屋琴　宮岡　光子

鵙屋琴がいる。日本座敷での障子明かりのもと、菊なますを前にしている。谷崎潤一郎描く『春琴抄』の主人公である。美貌の盲目の音曲師と弟子佐助との物語を通し、難波の愛憎物語は世に知られた。その一場面を見せて、多彩な作者の奥行きの深さを思わせる。〈篁簗の蘆舌の湿り神楽月〉にも注目した。燃えて燃えて、只今発光体の作者である。

今月の秀句

一枚の夜長にくるむ割れもの吾　伊藤由希子

秋の夜長に省みる。私は割れもの。衝撃が走る。言葉が土俗の言い方だ。小さい頃から耳にしたおばあちゃん言葉。まさしく長い年月使われてきた陰口のような身に突き刺さる言葉を自分も自分につぶやいている。私は割れもの。でも、生きなければならない。割れ口を繕いながら。

何をやっても私を見てくれない。そんな思いは俳句を続ける中で私もどれほどか味わった。もう遣ることがない。なにをやってもダメ。実はその底の底からどう立ち上がるか。一筋の光をどんな風に捉えるか、選者は、それをじっと注目しているのである。世に確かに残っている俳人は上述の這うような体験を重ねることを抜けてきた者だけである。私の七十年余りの句作はこの思いとの格闘であった。芭蕉の「あるときは倦んで放擲せん事をおもひ」（笈の小文）との述懐がそれであろう。

秋田のナイーブな感性鋭い作者を私は見続けている。

銀杏落葉踏みしめ服の色決める　曽根原とうこ

明るい。黄色い服は最高に弾む。大胆さがいい。上田から勤め先が東京に変わり、移住した。二十代の感受性が本誌を照らす。田中純子門下には師匠譲りの粘りがある。

北斎の春画見蕩るる除夜の炉よ　有手　勉

これはすばらしい除夜の過ごし方に違いない。やたらみんなに勧めることはできないが余裕そのもの。炉端の照り返しに紅潮するさまが目に浮かぶ。新年もどうかよろしく。

石蕗咲くや白湯を汝に供したる朝　水野　星闇

深く共感した。奥方が亡くなる。朝の仏前にまず白湯を供える。律儀なことであるが、故郷の土からの無言の習わしがそこにある。これだけで、一日気持ちが安泰である。奥方が守ってくれる。小さいお孫さんとの散骨報告状も感動した。

茅屋根にこもる雨音浪化の忌　久保美智子

浪化上人は井波の浄土真宗瑞泉寺の第十一代住職。元禄七年閏五月に去来を介して芭蕉に入門、敬愛が篤い。その年に亡くなる芭蕉の最晩年の弟子である。義仲寺からの小石を基に黒髪庵を井波に建立した。浪化は元禄十六年十月九日逝去。三十一歳。作者は井波在住。寺守のように上人を慕う。平常心がまろやかに伝わる。粘り強い熱意がある。

続続とサンタクロース窯を出る　金井　勝代

作者のご長女が陶芸家。時に煙突から入るサンタクロースが窯から出るは出るは。このユーモアが楽しい。

ドラム缶の火の爆ぜぞろり鱈の糶　木村由里子

鱈の糶市場風景。がんがん火が燃えているものか。北海の鱈の糶場は素朴そのもの。「ぞろり」の擬音がいのち。

山眠るお鷹ぽつぽの木つ端飛ぶ　穂苅　真泉

「お鷹ぽっぽ」はこしあぶらの木から鳩めいた鷹が彫られる、米沢市の笹野一刀彫として知られた郷土玩具。上杉鷹山公が冬季の副業に勧めたものという、その作業場が見える。句は弾むような調子を捉えて面白い。

わが座卓荒野のごとし遠い火事　我妻　民雄

身辺詠。ふと三島由紀夫の処女作『煙草』の末尾にある遠い火事の描写が過った。友人が勧める煙草に噎せる初めての体験が人生のどんな展開に結びつくのか、暗示が気になっていた。掲句の座卓に山と積まれた本その他。「荒野」はかっこいい。そこに「遠い火事」。三島の漠然たる願望はやがて『金閣寺』が書かれる呼び水になったものか。民雄はさて。ゆったりと、老境が深まりゆく。どこか文人風な楽しみも。

うねり来る伊福部昭夜長なる　荒川　美恵

釧路在住の作者と同じ釧路の作曲家伊福部昭。一言で「うねり来る」音楽家の評やよし。アイヌや北国の土俗性を独自な作品に仕上げた民族音楽の大家。映画「ゴジラ」の音楽を熊井啓が誉めていたことから私は関心を持ったに過ぎないが、作者美恵の郷土愛に共鳴した。

御神気のかくも冷たき出雲かな　長尾裕美子

神在月、旧暦十月の出雲詠。諸国から神様が出雲に集まる。毎年のこと、淡々と神事が執り行われるのであろう。ちやほやしない出雲大社の神さま。神に詳しい作者だけに、「御神気の冷たき」に神々しさにも種類があるものかと驚いた。

聖夜近し介護士飾るまつぼつくり　佐藤　初子

まつぼっくりが飾られる。この素朴な陳列。介護士の博愛の心に感銘した。どこか手近なものへの愛情が滲む。

舞ふ木の葉人も一瞬一舞台　櫻井　喬二

木の葉が散る。木の終末の舞台である。残酷にも、人の死も一瞬とはいえ生涯の舞台に違いない。小春日にいっぱい笑ったのが最後の舞台であった先述の田中信寿句のように、一期が身近に迫る。作者は東京在住。九十五歳。ぎりぎりを見つめ、記憶に残る句である。喬二さんまだ詠えますね。

雪を呼ぶものばかり画く絵描きかな　高橋　節子

寒々した光景が好き。今にも空から白いものが降る。雪をマイナス、寒いものと考えないで、ユトリロのように、「冬木立が好き」で行きましょう。好きなものに固執する気持ちは暖かい。

明日一つ失くす腎臓冬銀河　山崎　晶市

これはぜひ記念の俳句にしましょう。長い間世話になった臓器よありがとう。親から貰った腎臓よさらば、さらば。

雪が舞い芹避難する水の中　齋藤　元紀

芹も寒がりかな。雪が深くなるとさすがに芹も温かい水の中がいい。水中避難。芹の先が水面ぎりぎりに、水と遊んで。

推薦候補作をあげる。

如何ありやむささび啼ける宵の口　二階堂なつみ

雪隠におかめ火男初雪来　清水　逍径

寒の百合しばし息止め死者の側　髙橋　洋子